

アール・ブリュット作家ヘンリー・ダーガーの 創造性について

近 藤 香・里 見 志 穂・中 村 友 美

はじめに

アール・ブリュット (Art Brut) とは、社会の周縁に生きる人々によって生み出された芸術作品の総称である。中でもヘンリー・ダーガー (Henry Darger, 1892 - 1973) は、1万5千ページ以上にも及ぶ物語と挿絵を誰にも知られることなく創作し続けたアール・ブリュットの代表的な作家である。その膨大な量の作品は、彼の死の直前に彼がたった一人で生活していたアパートの一室から発見された。社会的には一見奇異な人物として見られていたダーガーが、いかにして自身の創造性を、その孤独な人生の中でエネルギーに溢れた色鮮やかな作品として表現し得たのか。そして、彼の創造性を支えたものは何だったのか。

本論では、ダーガーの創造性について、彼の人生や物語に頻繁に登場する“神”の存在とともに考察していきたい。

I. アール・ブリュットとは何か

「アール・ブリュット (Art Brut)」とは、加工されていない「生の芸術」という意味のフランス語である。1945年に、戦後のフランス美術を代表する画家のひとりであるジャン・デュビュッフェ (Dubuffet, J.) が、社会的疎外者 (精神病者、知的障害者、独居老人、過酷な運命に打ちのめされた人々たちなど) によって生み出さ

れた美的所産を「アール・ブリュット」と命名した。デュビュッフェは、それまで「精神病理学的美術 (psychopathological art)」あるいは「精神分裂病 (現代の用語では統合失調症) の芸術 (schizophrenic art)」などと呼ばれていた作品を、医学の分野から切り離したいという考えから「アール・ブリュット」という造語を用いた。ヨーロッパ各地を巡りながら、デュビュッフェは様々なアール・ブリュット作品に触れ、その独自の芸術的表現や創造性に関心を寄せていった。「本当の芸術、それはいつも私たちが予期しないところにある。それは、誰もそのことを考えず、だれもその名前を呼ばないところにある。芸術は、自分の名前を知られたり、その名前のせいで歓迎されるのを嫌う。それはすぐに逃げ出してしまう。芸術とは、人に知られないでいることに熱中している人物なのだ」という言葉が示すように、デュビュッフェは社会の周縁に生きる人々が、芸術的教養、あるいは称賛・利益といった商業主義の影響を受けることなく、ただ自身の内奥から溢れ出る衝動性によって生み出した「生の芸術」にこそ、「真の創造性」があると主張している (服部, 2003)。

また、1972年にはイギリスの美術史家ロジャー・カーディナル (Cardinal, R.) が「アール・ブリュット」の英語訳として「アウトサイダー・アート (Outsider Art)」という言葉を生み出した。カーディナル (2009) は、アウトサイダー・ア

ト（アール・ブリュット）を「公的な領域や芸術市場を避けながら、その独立性を成長させる独自の芸術的表現の様式」と定義し、「そのような芸術は、たとえ奇妙で個人的な世界であろうとも、非常に特異的で包み隠された、筋を通そうとする個々の創作者を反映する」と述べ、その独自性と個人における創作の意味に言及している。

現在、スイス・ローザンヌ市のアール・ブリュット・コレクションの館長であり、美術史家でもあるリュシエンヌ・ペリー（Peiry, L.）は、「孤独」「沈黙」「秘密」という3つのキーワードを挙げ、それらがアール・ブリュットにおける本質的な要素を示すものであると説明している。中でもアール・ブリュット作家たちの「孤独」ということに関して、「彼らは皆、これまでの生涯で悲劇を経験しています。（中略）孤独の中で暮らしていますが、そのなかで発言し、空想の象徴的な自分の世界というのを創りあげています。それは痛いほど空っぽな空虚な空間を埋める唯一の手段だからです」と述べている（Peiry, L., 2008）。

以上のデュビュッフエ、カーディナル、そしてペリーの論考からは、アール・ブリュット作家たちが、他者に宛ててではなく、その内的必然性により、自身に宛てて作品を生み出している様子が浮かび上がってくるといえるだろう。

アール・ブリュットの代表的な作家であるヘンリー・ダーガーは、50年以上もの間、誰にも気づかれることなく、完全な孤独のうちに壮大な物語である『非現実の王国で』を創作し続けた。以下、Ⅱ章とⅢ章において、ダーガーがどのような人生を送り、その中でどのような物語を創造していったのかをみていくことにする。

Ⅱ. ヘンリー・ジョゼフ・ダーガーの生涯¹⁾

ヘンリー・ダーガーは1892年4月12日イリノイ州シカゴで生まれた。父、ヘンリー・ダーガー・シニアはドイツ生まれの移民一世であった。母はローザ・ダーガー・フルマン、当時30歳であったが、ダーガーが4歳の時に死去する。死因は妹を出産した際の感染症であった。そのためダーガーの妹となるはずだった赤ん坊はすぐに養子に出されることになる。ダーガーは「自分には母親の記憶はなく、妹の名前も知らず、顔を見たこともない」と後に綴っている。その後、父との二人暮らしが始まったが、父は働きに出て不在が多く、ダーガーは家の中や街中で一人で過ごす時間が多かったという。また、幼少期から天候や火などに強い関心を示す傾向があったと同時に、幼女の目に灰をかけるなど、幼い子供に対して問題を起こすこともあったとされている。しかし、後にダーガーは幼女を熱愛するようになり、このことに彼自身も驚いている。

5歳から8歳（1897 - 1900）頃、ダーガーは聖パトリック・カトリックスクールに通学する。その後父と離れ、カトリックの児童養護施設に預けられることになり、8歳の時には洗礼を受けている。転校先の公立学校では、南北戦争、主に戦死者の数に強い関心を示した。また、彼は腕を奇妙に振るわせ、雨や雪が降るさまを真似るなどした為、級友からは「クレイジー」というあだ名で呼ばれ、いじめの対象となっていた。12歳（1904）になった頃、父と医者が請願し、彼は「リンカーン精神薄弱児収容施設」に移される。しかし、ダーガー自身は精神遅滞ではなかったとされている。ダーガー15歳（1907）時、父が亡くなり、その知らせを受けたダーガーは悲嘆に暮れることになる。その2年後、施設から脱走したダーガーはシカゴの教

母のもとに身を寄せ、カトリック系の聖ジョゼフ病院の清掃作業員として就職している。それから54年間、彼は市内の病院で低賃金ながらも過酷な肉体労働に従事することになる。

そして18歳から20歳（1910 - 1912）頃、ダーガーのライフワークとなる『非現実の王国で』の執筆が開始される。30代後半（1920年代）になると、ダーガーは職場を転々としながらもカトリック系の病院内の皿洗いの仕事を続ける。この頃、ダーガーは女の子の養子をとろうと神父に相談するが、その願いは叶えられなかった。また、創作活動に従事する傍ら、55歳（1947）の時には体力の衰えを憂慮され、聖ジョゼフ病院を退職させられている。その後は別のカトリック系の病院に勤務し、野菜を剥くなどの軽作業の担当として働くことになる。

1950年代から1960年代には、それまでに頻繁に描かれた残酷なシーンは影をひそめ、平和で牧歌的な風景の中に、裸の少女の体と蝶の羽をもったブレンギンを始め、多数の人物が登場するタイプの絵が描かれるようになる。そして1957年から10年間に渡り、『正しいときもままあるものの、天気予報士の予測に反した、寒さ暑さ、雨、雪、吹雪、夏の熱波と寒波、嵐や晴天、曇天の、天気記録』を執筆している。ジョン・M・マクレガー（1996）は「荒れ狂う嵐、暴風雨、竜巻、気温の激しい変化に対する興味は、一生を通して強迫観念とも言える域に達している。気象の変化に極度に敏感で、刻々と変わる空の光、色、形といったものにどうしようもなく魅せられていた」と述べている。ダーガー67歳（1959）の時、唯一の友人であったウィリアム・シュローダーが亡くなる。このことについてダーガーは「彼は私にとって兄弟のような存在だった。本当に独りきりだった。あれ以来誰とも友になることはなかった」と述べている。その後、ダーガーは脚の痛みの悪化により、

71歳（1963）で退職し、以後社会保障を受けながら生活することとなる。以降、それまでも増して頻繁に教会のミサに通うようになると同時に、自伝『私の人生の歴史』の執筆も開始する。そして80歳（1972）になった時に、聖オーギュスティン養老院に移り、翌年1973年4月13日息を引き取る。享年81歳であった。彼の遺体はイリノイ州デ・プレインズのオール・セインツ墓地に埋葬され、墓碑銘には“子供たちの守護者”と刻まれている。

Ⅲ．『非現実の王国で』概要

『非現実の王国で』は、ヘンリー・ダーガーによって執筆された物語である。美術史研究家であり、精神医学、精神分析学と芸術にまたがる独自の研究分野を切り開いてきたジョン・M・マクレガー（MacGregor, J. M.）は、この作品を独自の視点で分析し、その名の通り、『ヘンリー・ダーガー 非現実の王国で』（1996）という一冊の本にまとめている。本章では、この彼の著作を参考にしつつ、『非現実の王国で』について概要を述べていくことにする。

『非現実の王国で』は、18歳から20歳（1910 - 1912）頃に執筆が開始された。この物語の原稿はダーガーが養老院に移った後、彼の家主であったネイサン・ラーナーによって発見された。彼によると、ダーガーの部屋は新聞や雑誌、漫画本が天井高く積み上げられ、廃棄物で埋まっていたとされる。それらの入手場所は主にゴミ捨て場であった。彼は長年、清掃作業員として働いていたが、彼にとってはその仕事自体が宝探しのようなものだったのかもしれない。原稿は、壊れた玩具やぼろ靴、安物の宗教装飾品などのがらくたの残骸の中から発見された。タイプライターで清書された15,145ページ、15冊にわたる原稿である。同時に、この壮大

な物語を図解する挿絵を綴じた巨大な画集3冊も発見され、その画集の中には12フィート（約3m65cm）を超える長いものもあった。

『非現実の王国で』の正式な題名は『非現実の王国として知られる地における、ヴィヴィアン・ガールズの物語、子供奴隷の反乱に起因するグランデコ・アンジェリニアン戦争の嵐の物語 The Story of the Vivian Girls, in What is Known as the Realms of the Unreal, of the Glandeco-Angelinian War Storm, Caused by the Child Slave Rebellion』である。

物語の主人公は5歳から7歳の少女たち—7人のヴィヴィアン姉妹である。姉妹はいつもブロンドの髪でおそろいの服装をしており、人間離れした善良さと驚くべき勇気と軍略の才能を具えている。ダーガーは彼女たちを以下のように表現している。「彼女たちの美しさは言葉にできない、しかし彼女たちの性格と行い、徳と魂は、さらに可憐で一点の染みもなかった」。また、ダーガーはしばしば彼女達を聖母マリアに例え、志が高く、底抜けに楽観的で、深い信仰心をもつと説明を加えている。

この物語の根底に流れるテーマは、一貫して“戦争”である。『非現実の王国』の国民たちは皆、子供奴隷制度の賛否を巡って繰り広げられる凄惨な抗争に参加している。子供たちの敵は大人の男たち、子供奴隷を所有する邪悪なグランデリニアンである。また一方で、善良な人々も登場し、彼らは、ヴィヴィアン・ガールズの父や叔父によって統治されているキリスト教の国々の住人である。ダーガーの戦争についての概念は幼少期におけるアメリカ南北戦争に関する知識の影響を受けており、戦闘や虐殺の記述は数百ページにもわたる。物語中にはダーガーが幼少時代を過ごした孤児院も頻繁に登場し、戦争や災害の犠牲になった子供たちで溢れかえっている。物語の中で、ダーガー自身はキリ

スト教の大義の為に闘う英雄的兵士として、また、子供たちの第一の庇護者として登場する。

1912年7月、彼は現実世界で一枚の女の子の写真を紛失する。それは彼が様々な印刷物から切り抜いていた大量の図版のうちの1枚であった。彼はその女の子を「アニー・アーロンバーグ」と名付けていた。彼は失った写真を返してくれるよう神に祈りを捧げるが、結局写真は見つからず、まもなく、物語の中でも戦闘の流れが変わり始める。神に失望した彼は、現実世界においてそれほど信仰していたカトリック教会を離れ、空想世界—非現実の王国ではグランデリニア軍に参加するようになる。この頃描かれた物語は神への憎しみで溢れ、キリスト教軍は敵とみなされている。彼は数百ものページを割き、子供たちへの拷問と殺戮を細部にいたるまで描写している。

このように『非現実の王国で』の中には残酷な表現が多く描かれており、ダーガーの中に存在するサディズム傾向を物語っているようである。しかし、物語の中には明るい面もあり、その一つとして『ブレンギグロメニアン・サーペント（ブレンギン）』と呼ばれる異様な動物の発明が挙げられる。ブレンギンは、子供たちをこよなく愛し、子供を傷つけるものを憎んでいるという心理的特徴を持つ。

『非現実の王国で』における、暗くサディスティックな表現と、明るく愛にあふれた表現の混在は、幼い子供に対して愛と憎しみの相反する感情を抱いていた、ダーガーの心模様とも重なるものである。

本論のⅡ・Ⅲ・で見えてきたように、ダーガーの生涯や作品において重要と思われる点はいくつも挙げられる。しかし、本論ではその中でもダーガーの創造性と神との関連に注目して、以下に考察していくことにする。

Ⅳ. 日常と非日常

—境界を生きるものの創造性—

本論のⅡ. でも述べたように、ダーガーは幼くして母を亡くし、生まれたばかりの妹との別れをも余儀なくされた。また、唯一の家族であった父とも深い関わりを持つことなく施設に預けられることとなった。その後も複数の施設を転々とする生活が続き、幼いダーガーを取り巻く環境は、基本的な安心感や温かな愛情を得られるものではなかったと想像される。ジョン・M・マクレガー（1996）は「情緒的、知的に発達する機会を剥奪されていた彼の刺激の源は想像力にあった。豊かな空想が、少年時代の歴史に対する興味や外の世界に対する興味にとってかわる。『非現実の王国で』の基盤となっている潤沢な幻想は少年時代に培われた」と述べている。一般には他者との繋がりが増え、外の世界に対する興味が膨らむ思春期・青年期時代を、彼は自らの想像の世界に閉じこもって過ごしていたと考えられる。では、そのような状況の中で成長したダーガーは、いかにして『非現実の王国で』を創作していったのであろうか。

彼が住んでいたアパートの隣人や大家は、彼について「人と距離をおいていた」「他人を拒んでいた」「よく、“放っておいてくれ”と言っていた」と述懐している。彼は周囲の人間と関係を築くことが出来なかったと思われる一方で、他者と接することで自身の空想世界が壊れてしまうという思いを抱いていたのではないかと考えられる。彼から生み出された物語は、ただの空想とよぶにはあまりに緻密に、かつ鮮やかに描かれており、彼はまさにその物語の中に“生きた”と言うにふさわしいだろう。しかし、彼はその物語の中に埋没することなく、清掃員としての日常と、空想の物語の紡ぎ手であり登場人物という非日常のどちらをも生きたのであ

る。そのことは、彼が物語のタイトルに『非現実』と銘打ち、現実と非現実とを区別していたことから示唆される。

ダーガーに限らず、創造的な作品を作り出す芸術家と呼ばれる人々の中には、日常と非日常との間の、危うい境界の中で生きている人が少なくない。豊田（1998）によれば、ユングは創造性を「飢え、性、活動、反省とともに最も基本的な人間の本能」とみなしている。また、河合（1994）は、影と創造性について以下のように述べている。「創造過程の中で、意識と無意識との対立が生じるが、それをそのまま長く耐えることが大切である。（中略）そのうちにこれらの対立を超える調和が発見され、対立する両者の片方が、否定される決定ではなく、両者を生かす形での統合の道が開けてくる」。ダーガーは、現実世界と非現実の世界のどちらにも足をかけ、自らの狂気を傍らにおき、それに触れながらも現実生活を生きた。そういった彼の一見不安定に見える生き方は、視点を変えれば、現実と非現実—あるいは正常と異常、意識と無意識—の境界の上で絶妙なバランスを保っていると考えられるのではないだろうか。他者との交流が無きに等しい孤独な彼の人生や奇怪な行動の数々を見ると、ダーガーは現代ではおそらく“異常”として見られてもおかしくはない。そうした彼の生き方、そして彼の生み出した作品の数々は我々の内にある狂気存在を教えてくれるようにも思える。

ダーガーは、人間が生きていく上で出会う様々な痛みや苦しみ、憎み、ともすればこちらにも飲み込まれてしまいそうな狂気を、残虐で時には性的な表現を用いて、何の躊躇もないように描いている。莫大なエネルギーを注いで創られたその作品は、見ている我々をなぜか惹きつけてやまない。豊田（1998）は創造性について、「ものを生み出すというプラスの面ばかり

に目がゆきがちであるが、それと裏腹に死につながる自己破壊性や攻撃性とも深く結びついている」とし、創造性の持つ両面性について指摘している。そして、「意識と無意識、この相容れないものの統合をユングは滝にたとえているが、そこにはすさまじいエネルギーの放出があり、そのエネルギーは創造的にも破壊的にもなりうる」と付け加えている。

ダーガーのエネルギーは、彼を破壊することなく、観る人を惹きつけるまでの創造的な作品を生み出す方向に働いた。常に正常と異常の狭間で揺れ動き、一步間違えれば異常の中に飲み込まれてしまいそうな危うさの中にいたダーガーであるが、完全に非日常に入り込んでしまうことなく、かと言って、日常の側の生活を送っていただけでは発することができなかったであろう莫大なエネルギーを創作に費やした。彼のエネルギーを創造的に働かせ、境界で生きることを可能にしたもの、対立する「両者を生かす形での統合」（河合,1994）を可能にしたのは一体どのようなものであったのか。

その中の一つとして筆者らが注目したのが、彼の生涯や物語の中に事あるごとに出てくる“神”の存在である。ダーガーにとって生きることそのものである創作活動と“神”の存在は、切っても切り離せないものであるように思われる。

日常と非日常の境界に生き、その危うさの中に身を置きながら壮大な物語を紡ぎ出していったダーガーにとって、“神”とはどのような存在であったのか。本論のⅤ.では、ダーガーがどのような信仰心を持って日常、あるいは非日常を生きていたのか、またその信仰心が『非現実の王国で』の中にどのように表れているのかを概観しながら、ダーガーの創造性にとって“神”の存在がいかなるものであったかを考えていくことにする。

Ⅴ. ヘンリー・ダーガーと神

(1) ダーガーと信仰、そして物語の中の神

ダーガーの幼少期からの壮絶とも言える人生の中で、「何もしようとせず沈黙したままの神」（MacGregor,1996）に対するダーガーの態度はどのようなものであったのだろうか。

本論のⅡ.にもあるように、ダーガーは6歳からカトリック系の施設で育ち、8歳の時に教母の計らいでカトリックの洗礼を受けている。また、職場もカトリック系の病院を転々とし、毎日のように教会のミサに通い続ける熱心なカトリック信者であった。晩年には、朝の聖体拝領（イエスの血と肉を意味するブドウ酒とパンをいただく聖餐）に始まり、一日に4回ものミサに参列していたと言われている。そのような篤い信仰心をもったダーガーは物語の中においても、主人公のヴィヴィアンガールズについて「毎日ミサと聖体拝領に出かけ、小さな聖人のように暮らしている」と記述している。

ダーガーが創作活動をしていた部屋からは、聖書や十字架など宗教に関係する品々が数多く見つかった。中でも部屋の聖域ともいえる暖炉のマントルピースには、聖母マリア像や聖家族の肖像画がいくつも飾られていたと言う。また、部屋の壁面にはロザリオと十字架、宗教画が飾られており、その宗教画には「Christ is the head of this house, the unseen host at every meal, the silent listener to every conversation.（キリストはこの家の主、姿は見えなくとも食事をともにし、声はなくともすべての言葉を聞いている）」とあった（小出,2008）。アパートの一室で、たった一人秘密のうちに進められていったダーガーの創作活動であるが、その傍らには唯一、神の存在があったといえるのではないだろうか。

物語においては、大人たちに虐げられた子供

たちを救うためにヴィヴィアンガールズが勇敢に戦う様子が描かれており、ダーガーも自身をキリスト教の大義のために戦う英雄として、また子供たちの第一の庇護者として登場させている。このダーガーの子供たちへの思いは、自身の生い立ちに起因するものではないかと考えられる。子供たちの庇護者としての彼の立場は、施設をたらいまわしにされた自分自身や、生まれてまもなく養子に出された妹を救いたいとの思いが込められているように思われる。それは、単に愛情という言葉では表現しきれない複雑な感情をも内包していたのではないだろうか。

一方で、ダーガーの神に対する思いは従順なる信仰心だけではなく、1912年、ダーガーは「アニー・アーロンバーグ」と名付け、大切にしていた女の子の写真を紛失してしまう。写真の女の子は実在するシカゴで誘拐・殺害された少女であった。ダーガーは新聞に掲載されたその少女の写真を切り抜き、大切に保管していた。また、唯一の友人であったウィリアム・シュローダーの家の納屋に彼女を祀る祭壇をつくっていたという。写真紛失後、彼はガレージに祭壇を作り、写真を返してくれるよう神に懇願し、祈りを捧げ続けた。なぜ彼はこれ程までに必死になって神に祈りを捧げ続けたのであろうか。それは、少女の写真がただ大切な写真であったというだけではなく、「大人によって虐げられた子供の象徴」というような意味合いも込められていたからなのではないだろうか。大人の都合により養子に出されてしまった妹や、大人の意思によって施設を転々とせざるを得なかった自身のつらい子供時代をどこか重ね合わせていたのかもしれない。

しかしついに彼の祈りは神に聞き届けられることはなく、写真が彼の手元に戻ってくることはなかった。ダーガーは、子供の味方であるはずの神が何もせず、沈黙し続けたことに失望し、

深い怒りを抱くようになる。そして、あれほどに信仰していたカトリック教会を一時離れることとなる。また、1929年頃、ダーガーは女の子の養子をとろうと神父に相談するが挫折し、神に拒まれたと感じる。そのようなダーガーの神への不信は、『非現実の王国で』の物語にも影響を及ぼし、キリスト教国連軍の苦戦と、子供たちの悲惨な死が延々と記述されることになる。それまでは、自身をキリスト教の大義のために戦う英雄として登場させていたが、この時期にはキリスト教軍の敵として自身を登場させ戦う場面が描かれるようになる。

ジョン・M・マクレガー（2008）は、ダーガーの信仰について以下のように述べている。「彼の信仰は、しかし揺るぎなく敬虔でありながら、神との闘争という矛盾を内包する、逆説に満ちたものだった」。それでもなお、彼は敬虔なクリスチャンとして、神の信仰にすがりついていた。このように、彼の中には神への篤い信仰が存在したことがうかがえるが、一方でその信仰心ゆえの非常にアンビバレントな感情をも同時に持ち合わせながら、彼は生涯にわたって神に祈り続けたといえよう。

(2) 神との対話 ―ダーガーの創造性―

ダーガーの創作活動は神とともにあり、彼の人生は神との対話とともにあった。ジョン・M・マクレガー（1996）は、物語の中の残虐な描写について「物語の後半になって、このような記述が頻繁に出てくるにつけ、彼の中に大量殺人者の可能性が潜んでいることを嗅ぎとらないわけにはいかない」と記述している。しかし、「その可能性は彼の篤い信仰心と、神の存在と権威への絶対帰依によって封じ込められていた。この葛藤こそ、彼の人生と著作の核にあるもので、危うい均衡を保ちながら常に揺らぎ続けていた」と揺れ動く彼の精神を、神の存在と彼の

信仰心が支えていたことを示唆している。そのことを示すものとして、本論のⅡ. で述べたような、ダーガーの天候への強い関心が挙げられる。ダーガーは幼い頃より刻々と変化する天候に強く魅かれており、雪や雷雨の日には一日中窓辺に立って外を眺め、止んでしまうと涙を流したほどであった。おそらく彼は、自分の中に存在する激しい感情を荒れ狂う嵐や雷雨に投影し、また、天候という人間が支配しきれない自然に、神のような大いなるものの存在を感じていたのではないだろうか。

では、ダーガーの創造性にとって神の存在とはいかなるものであったのか。豊田 (1998) の言うように、ダーガーは「意識と無意識の相容れないエネルギー」を創造性につなげることができたと考えられる。そこには生涯にわたってダーガーの傍にありつづけた神の存在があり、その存在は彼にとって心の拠りどころと言うだけでは表現しつくせない、さらに奥深い意味があったのではないかと想像される。

豊田 (1998) は同著の中で、エーレンツヴァイク (Ehrenzweig, A., 1967) の言葉を引用し、以下のように述べている。「彼によれば、精神病患者というのは無意識の渦の中に置かれるものの、無意識の子宮がないために、無意識の走査が起こらず、自分がばらばらになりそうな死の恐怖にさいなまれるのだと言う。(中略) 心理療法師の役割というのは、まず、そこで変容が起こることを可能にする器を提供することが大事であることがわかる。その中でイメージを媒体として、自己破壊的に向かいそうなエネルギーを創造的なものに向かわせることができるような容器であることが望ましい」。ダーガーの場合は、自らを抱える器として神の存在があったのではないだろうか。さらに豊田 (1998) は、ユングが晩年熱意を注ぎ込んだ錬金術の研究について言及し、錬金術の作業中、術師の傍

らにはいつも「人間の理性を超えた、宇宙の動きに身を任せる姿勢を持つ存在」がいたと述べている。そして、これこそが二者関係の大切さが強調されるゆえんであるとしている。ダーガーの場合、非現実の世界で神と二者関係を結び、その神の器に抱えられることで、彼の人生そのものである創造的活動が可能になったと考えられる。

おわりに

本論では、ダーガーの歩んだ人生や彼によって生み出された作品を概観しながら、彼の創造性について考察することを試みた。幼い頃に両親を亡くし、深い孤独の中で生きてきたであろうダーガーは、半世紀以上にも渡り自身の内なる世界に形を与え続けてきた。その姿は、創造性の中にこそ彼の「生きられる場所」があったことを示しているように思われる。日常とかわるうじて繋がりをもちながらも、そのような「生きられる場所」としての非日常に身を置き続けたダーガーが、創造的な作品を生み出し得たのは、彼の内に溢れる凄まじいエネルギーを創造性へと向かわせるような器としての神、沈黙し続けながらも彼の創造過程を見守り続けた神の存在が彼の中にあったためと考えられる。

ある側面から見れば、空想世界でその人生を生きたダーガーは「常軌を逸している」と捉えられるかもしれない。しかしダーガーは苦心の末に「非現実」に生きる場を見出したと言え、そのような彼の生の営みを「常軌を逸している」という一面的な見方だけで捉えることはできないと筆者らは考える。本論執筆に際し、ダーガーをより多面的に捉えようとする試みは、筆者らにとって、痛みや苦しみの中にあっても人間に存在し得る可能性や生命力に触れることでもあった。今後も、そのような人間の持つ可能

性や生命力を信じながら、アール・ブリュットにおける創造性について考察を進めていくことで、正常とは何か、異常とは何かという問いについて考え続けていきたい。

〈注〉

- 1) ダーガーの生涯についての記述に際しては、ジョン・M・マクレガー (MacGregor, J.M.) とマイケル・ボーンステール (Bonesteel, M) の著作に基づき前波 (2007) が作成した年譜を参照した。

〈付記〉

本論執筆にあたり、貴重な御助言をいただいた京都文教大学臨床心理学研究科教授の秋田巖先生に心より感謝申し上げます。

文献

- Cardinal, R. (2009) : *Outsider Art and the autistic creator* Philosophical Transactions of the Royal Society of London. Series B, Biological Sciences, 364 (1522), 1459-1466
- Ehrenzweig, A. (1967) : *The Hidden Order of Art* : A

- Study in the Psychology of Artistic Imagination*
University of California Press, Los Angeles
- 服部正 (2003) : アウトサイダー・アート—現代美術が忘れた「芸術」— 光文社
- 河合隼雄 (1994) : 河合隼雄著作集2 ユング心理学の展開 岩波書店 pp212-213
- 小出由紀子他編 (2008) : HENRY DAGER'S ROOM 851 WEBSTER インペリアルプレス pp56
- MacGregor, J. M. (1996) : *Henry Darger In the Realms of the Unreal*. Fondazione Galleria Gottardo 小出由紀子訳 (2000) : ヘンリー・ダーガー 非現実の王国で 作品社
- MacGregor, J. M. (2008) : ヘンリー・ダーガーの部屋 変容するアウトサイダー・アート空間 小出由紀子他 (編) HENRY DAGER'S ROOM 851 WEBSTER インペリアルプレス pp70
- 前波依理 (2007) : 美術手帖 ヘンリー・ダーガー 894 号 美術出版社 pp69-71
- Peiry, L. (2008) : アール・ブリュットへの旅 今井祝雄 (編) 進行形アート講座 湖西のキャンパスで 樹花舎 pp115-138
- 豊田園子 (1998) : ユング心理学の〈創造性〉河合隼雄 (編) ユング派の心理療法 日本評論社 pp59-71

Abstract

The Creativity of Art Brut Artist Henry Darger

Kaori KONDO, Shiho SATOMI, Yumi NAKAMURA

The purpose of this paper is to consider the creativity of Henry Darger. Darger is known as an Art Brut artist. The French term Art Brut (meaning “Raw Art” often referred to as “Outsider Art”) was invented by French artist Jean Dubuffet in 1945 to describe art created outside the boundaries of official culture and society. What Dubuffet valued in these art works were the raw expression of artist’s inner world, free from any cultural or social constraint. Art Brut emphasized that artist should create their art for themselves rather than for others.

Henry Darger (1892 – 1973) remains, one of the most prominent artists in the history of Art Brut. He was a solitary man who lost his parents at an early age and spent his youth in a Catholic home and in an asylum. In the privacy of his small rented room, he created 15,145 pages of text and hundred illustrations entitled *The Story of the Vivian Girls, in What is known as the Realms of the Unreal, of the Glandeco-Angelinnian War Storm, Caused by the Child Slave Rebellion*. No one knew that Darger created an imaginary world in secrecy. His artwork was discovered around the time of his death.

As Toyoda(1998) has pointed out, creativity does not only have its positive side but also a negative side such as self-destructiveness and aggression which could lead to death. In Darger’s case, he was able to use his immense energy creatively and not destructively.

In life, Darger was a pious Christian and almost every day he attended Mass and prayed devoutly. Despite his deep belief in God, in his writings and paintings, he occasionally showed his despair and anger towards God’s silence. He experienced ambivalence toward God. We consider that such ambivalence led Darger to his extraordinary creative work.

Key words : creativity, Art Brut, Henry Darger